

令和 7 年度の主な事業報告

社会福祉法人 ふじの郷

●法人全体

①男子棟増改修プロジェクト再開に向け、収益力の維持向上

男子棟増改修については、再開に向け、収益増に向けた精査及び時代に即した施設検討整備を行った。本年度は、さつき学園既存施設の老朽化対応や園外整備も含めた修繕整備に努めた。

②障害福祉サービス等報酬改定に伴う新基準、加算変更等への対応

令和 6 年 4 月に実施された報酬改定においては、大規模な報酬改定の内容変更以降、新基準及び加算変更等の対応については問題なく対応している。

③感染症対策の充実と法人内外との連携強化

各事業所で単発的に感染が発生しているが、集団感染に及ぶことなく、各事業所の感染症対策が適切に実施されており、事業は継続できている。事業継続計画（BCP）に基づく感染症対策も浸透してきており、事業所間での協力体制（応援職員の調整等）や行政機関、他法人との情報共有も円滑に実施できる状況となっている。

④防災対策の強化

災害などの緊急事態においても早急に事業活動（福祉サービスの提供）を復旧させ、法人資産の損害を最小限にとどめるため、事業継続計画（BCP）の周知徹底に努めると共に定期的に内容を見直し、必要に応じてアップデートを行っております。また、備蓄品の量や内訳についても管理徹底に努めた。

⑤法人広報の充実と人材確保

法人広報については、年 1 回広報ふじの郷を発行、ホームページの内容についても法人広報委員会で検討を重ねて充実した広報活動ができている。人材確保においても、求人情報への継続掲載や求人説明会（就職相談会など）へ積極的に参加し、人材確保の維持に努めた。

●さつき学園

令和 7 年度は、利用者の尊厳と安全を最優先に、生活の安定を守ることを基本として運営を行った。

職員体制の変動や利用者の高齢化の進行などにより、支援環境としては厳しい状況も見られたが、日中活動および生活支援を継続し、大きな混乱なく運営を維持することができた。一方で、組織体制や内部統制の面においては課題も明確となり、令和 8 年度に向けた再整備の必要性が確認された一年であった。

①職員体制の安定化と人材確保

計画的な人材確保と職員体制の安定化を目標としたが、中堅職員の退職や休職等により、体制は不安定な状況が続いた。

一部期間においては管理職が現場支援に入りながら運営を維持した。

採用活動は継続したものの、定着および人員バランスの面では課題が残る結果となった。

②支援の質向上と権利擁護の推進

強度行動障害支援基礎研修については全職員が受講し、支援の共通理解の基盤づくりを継続して進めた。

「集団から個へ」の視点に基づき、個別支援の見直しを行い、多くの利用者が安定した生活を維持している。

一方で、支援スキルのばらつきや対応困難事例に対する負担増加により、不適切支援のリスクも見られ、継続的な研修等の体制整備が必要な状況である。

③利用者生活の充実と高齢化への対応

利用者の高齢化に伴う身体機能の変化に対応するため、環境整備および日中活動の見直しを行った。

手すり設置やセンサー導入等により転倒予防を進めた結果、事故件数の減少が見られた。また、日中活動や行事については内容の見直しを行い、利用者の状態に応じた活動提供に努めた。

④施設整備と危機管理体制の強化

感染症対策については、初動対応と情報共有の徹底によりクラスターの発生を防止した。施設整備については、築年数を踏まえた修繕を実施し、生活環境の維持に努めた。

●グループホームけやき坂

①週末の生活の充実として外部サービスの検討

外部サービスの利用者が増えました。外部サービスと連携を取りながら継続していく。行動援護利用 2 名契約中。また、セルフプランから相談事業所契約 1 名契約になりました。

週末に非常勤職員 1 名配置しているので、買い物やおやつ作りなど行っています。

週末、利用者が多い日は増員体制で対応しています。利用者の特性に合わせています。

②短期入所について

短期入所は 1 名ですが令和 7 年 1 2 月 1 7 日から開始が来ています。令和 8 年 4 月には 2 件の見学・検討したい方がいます。利用できるように繋げていきたい。

③利用者の生活の振返り

全利用者アセスメントを取り直して支援を振返る。その都度、会議を開き支援の統一を目指し有効な手段を見つけていく。また他機関とも協力して良い支援方法を探っている。

家庭状況に応じて変化してきている。

家族・相談事業所・福祉課・けやきで都度モニタリングを行っている。

④職員の安定確保

新規採用も含めて求人を出していく。

⑤その他

地域推進会議をさつき学園と行いました。防災関連に多くの関心が集まりました。地域との連携が必要です。今後、どの様に関係作り信頼関係を築て行けるように勧めます。

各自室の押入れに鍵を付け、個人の衣類はなるべく部屋に移して、短期入所部屋を整理

整頓していく。週末利用者が増えてもいいように準備をしておく。

●神山さつきの森

①支援方針

子どもたちが安心して過ごせるよう、活動内容や環境をわかりやすく整理し、一人ひとりの感覚特性に配慮した支援を行いました。PECS を活用したコミュニケーション支援を継続、要求を自発的に伝えられる場面が増え、安心・安全な環境の中で、子どもたちの成長や発達を促すことができました。

②人材育成・支援スキルの向上

自閉症の専門研修や外部施設見学（放デイ・生活介護）を行い、自閉症の特性に合わせた支援について学び現場に活かしました。ティーチャーズトレーニング（自主研修を職員全員が受講）を継続し、毎日のケース検討と外部の専門家のアドバイスを受けて更なる支援の充実と職員の支援技術の向上を図りました。HUG の共有機能を活用し、利用児の課題・支援方法の共有を行うことで、職員間で共通理解して、良い支援につなげることができました。

③アセスメントと目標設定

乳幼児発達スケール（KIDS）や S-M 社会生活能力検査、自閉症特性シートなどを用いてアセスメントを行い、行動観察の情報と合わせて個別の支援計画を立て、五領域の支援目標を明確にして活動を提供しました。

④保護者支援と連携

昨年度から導入した HUG システムを通じて、日々の支援について情報を共有しました。保護者の相談、自宅での困りごとについては、家庭や学校と連携することで深刻な問題に発展することを予防しました。6月と12月には保護者交流会を開催。12月には竹山美奈子さんを講師にお招きし、「絵本『すずちゃんののうみそ』から考える障害理解と“伝わる声かけ”～最重度の自閉っ子と笑って暮らす！～」の研修会を開催し、保護者にとって多くの共感と学びを得る機会を提供できました。

⑤事業運営・収入増に向けて

専門的支援実施加算の算定に向けて、個別の専門的支援実施計画を作成し、より丁寧な支援体制を整えましたが、加算算定には毎回の記録作成が必要となるため、現場の業務負担が大きく、予定したほどは算定できませんでした。第一・第三土曜日は普通学級在籍の子どもたちも多いため、部活動がある時やテスト期間になると欠席が増えました。全体としては平日の利用者を増やしたことで、前年より利用児童数は年間で50名以上増え、収支差額は前年比よりプラスになりました。

●ふじあざみ

①支援について(継続)

自閉症と言っても一人一人その障害は違い、その人の特性を知った上での支援が必要です。特性を知るための評価、その評価に基づいた関りの工夫が大切です。今年度は評価に関する研修を受けた職員が「評価の大切さを改めて教えられました」と報告書に感想を記し、職員研修でもその大切さを訴えていました。例えばですが、外出時の内容を説明する

にあたり全体への説明だけでは理解できない利用者がいます。その方には全体説明の後、躓き易い点に配慮した個別での説明を行います。外出中も手本になるような利用者の近くで行動して貰う等の工夫もします。こうした配慮や工夫が整えられたのは、何度も何度も評価を繰り返した賜物です。

ちょっとした変化を見落とさず日々評価し続ける事の大切さを多くの職員が肌で感じ取った一年だったのではないのでしょうか。

今年度はユニットの壁を飛び越えた活動が出来ました。広い会場を借りて行ったダイナミックリズムには3ユニットの利用者合わせて25人近くが参加しています。2つのユニット合同で歩行に出かけたり、各ユニットから選抜した利用者でいくつかのグループを作ってリズム運動や課題に取り組んでいます。

今までは個別対応に留まっていましたが、リズム運動、集会、学習といった集団活動も行うようになりました。散歩も歩くだけではなく行動トレーニングや耐性トレーニング的要素を含ませ、散歩ではなく「歩行」という名称に変えて取り組んでいます。

大脳新皮質(人間脳)を働かせることを支援の中心に置くように心がけています。リズム運動や集会時には表情や目の動きや姿勢や上下肢の様子から意識レベルを推察し、例えばリズム運動中に手を叩く等の常同行動がみられる時は手に物を持ってもらうことで手叩きを止め、上位脳へ上げる等の工夫をしています。

②プロジェクト会議について(ふじあざみの方向性)

ふじあざみの今後を考える為、月に1回プロジェクト会議を開いています。新棟移行時3ユニット体制でスタートしましたが、上記の通りユニットの壁を越えての活動を行うようになりユニットの見直しが必要となりました。加えて定員増と定員枠、個別対応と集団活動、ダイナミックリズムが出来る環境整備、その他多くの課題を抱えるため単年度に収めず時間を掛けての検討を考えています。

③地域連携について

災害時は特に地域との連携が必要であり、そのためには日頃の関係が大切と考えます。地域の方とどのように向き合い、結びついて行くか仕組み作りをとおして考えたいと思います。1月23日にたこ焼のキッチンカーを呼んで地域の方にも購入して貰いました。これからはパンの移動販売車が定期的に来所するので地域向けに宣伝をし、一人でも多くの方に足を運んで貰おうと考えています。

以前から大淵地区のおまつりには参加していましたが、八王子地区の祭りに今年初めて参加し、より近い地域の方たちと交流を持つことが出来ました。

④職員体制について

職員が定着し、1.5対1の職員体制を維持し続けられています。

気づき週間を設け、職員同士褒めたたえる内容のメモを提出して貰っています。この取り組みは評判が良く、職員集団の纏まりにも寄与しています。

歩行やダイナミックリズム等、歩いたり走ったりが多く、特に高齢の職員が足腰に負担が掛かる様子が若返りが今後の課題です。令和8年度は新卒者1名が内定しています。

⑤研修について

コロナ学舎による研修会に積極的に参加し、ふじあざみの事例検討も研修の中で取り上げて貰いました。

自閉症協会やeサービスによる研修会及び自立支援協議会や自閉症三島支部主催の施設見学に参加し、自閉症の障害特性と教材の作り方や使い方について学びました。

各ユニットから事例を挙げて貰い検討、報告、周知を行いました。

⑥施設外支援について

モニタリング時に本人の要求を聞き取り、意思決定支援に基づく支援に心がけました。上手に表出できない方が多く、ジャンル別に複数の写真や絵カードの中から選んで貰う方法で聞き取っています。

桜見、ひまわり畑、風鈴祭り、コスモス畑、季節を感じられる外出を実施しました。買い物、外食、電車バス等の交通機関、入浴、その他多種多様に渡る施設外での経験を積んでいます。

⑦アデノウィルス感染症について

10月10日(金)にアデノウィルス感染症者が2名出ました。10月28日が最後の発生で利用者13名、職員0名という罹患状況でした。感染対策としてリズム運動時の手繋ぎの中止。トイレ使用後や昼食時、その他節目での消毒を励行しました。消毒は微酸性電解水を主に使用しました。

⑧利用者について

令和7年7月に男子利用者1名がふじあざみを退所して富士本学園に入所しました。

令和8年1月にふじあざみを退所しグループホームに入所した女性利用者がいます。同じく1月に富士本学園に入所しそこから木曜日と金曜日の二日間だけふじあざみに通うことになった女性利用者が1名います。